第２９期新潟市社会教育委員会議

<table>
<tr><td>実施年月日</td><td colspan="3">第４回　　平成２２年１１月１日（月）実施</td></tr>
<tr><td>会　　場</td><td>市役所 白山浦庁舎７号棟４０５</td><td>傍聴人</td><td>０人</td></tr>
<tr><td>会 議 内 容</td><td colspan="3">1.　開会
2.　協議事項
（1）　「家庭と地域の教育力の向上について」市内実践者の取組みについて
白小おやじの会事務局　笹川秀則氏
江南小学校区ｺﾐｭﾆﾃｨ協議会・東明第一自治会会長　木島重夫氏
ＮＰＯ法人ヒーローズファーム代表理事　西田卓司委員
（2）　「家庭と地域の教育力」実態調査について
3.　報告事項
（1）　第 10 回新潟県社会教育研究大会について
（2）　第 52 回全国社会教育研究大会福島大会について
4.　閉会</td></tr>
<tr><td>出　席　者</td><td colspan="3">【社会教育委員】
相庭和彦　伊藤裕美子　笠原孝子　川上光子　雲尾周　新藤幸生
中村恵子　西田卓司　藤澤眞璽　真柄正幸
【事務局】
貝瀬教育次長　玉木生涯学習課長
本多地域と学校ふれあい推進課長補佐　山下中央図書館サービス課長
土田豊栄地区公民館長　窪田新津地区公民館長
福島大畑少年センター所長　杉山主査（地域と学校ふれあい推進課）
佐藤主査（中央公民館）　原係長　南雲主査</td></tr>
<tr><td>資料</td><td colspan="3">次第、座席表
資料１　白小おやじの会 会則
資料２　新聞記事 東明第一自治会（東区）（新潟日報 平成 21 年 11 月 4 日付より）
東明だより(H22/8/20 発行、H22/10/10 発行)
資料３　団体実態調査について
資料 4-1　企業・事業所、ＰＴＡについて
資料 4-2　平成 22 年度新潟県小中学校ＰＴＡ連合会実施の「ＰＴＡ活動状況調査票」
資料 5-1　市民意識調査「家庭と地域の教育力に関するアンケート」調査票
資料 5-2　市民意識調査　第３回会議での意見と教育委員からの意見に対する修正について
資料６　第 10 回新潟県社会教育研究大会 参加報告
<u>参考資料</u>
資料７　新潟県社会教育委員の会議 審議のまとめ（平成 22 年９月 13 日）
<u>当日追加資料</u>
白小おやじの会の活動について
西田委員プロフィール
資料 6-2　第 52 回全国社会教育研究大会福島大会 参加報告</td></tr>
</table>

会　議　録

１．開会

（事務局）

これより第29期新潟市社会教育委員会議第４回を開催いたします。

お手元の資料を確認させていただきます。（―省略―）

ここからは相庭議長から進行をお願いいたします。

（相庭議長）

本日の出席について報告してください。

（事務局）

本日は南委員から欠席の連絡をいただいております。新藤委員から遅れる旨の連絡がございました。新潟市社会教育委員の会議運営規則第９条に定める開催に必要な人数に達していることをご報告します。また、本日の会議について傍聴の定員を５人として周知しておりますが、傍聴希望はございませんでした。

２．協議事項

（１）「家庭と地域の教育力の向上について」市内実践者の取組みについて

（相庭議長）

本日は３人の実践者の方よりそれぞれの取組みについて各20分ずつ事例発表をいただき、その後30分間の意見交換をおこないたいと思います。発表者について事務局よりご紹介をお願いします。

（事務局）

発表順にご紹介いたします。白小おやじの会事務局長／笹川秀則様、江南小学校区ｺﾐｭﾆﾃｨ協議会・東明第一自治会会長／木島重夫様、ＮＰＯ法人ヒーローズファーム代表理事であり当社会教育委員会議の委員でもある西田卓司委員の３名です。

（相庭議長）

では、最初に白小おやじの会の笹川さんからお願いいたします。

（笹川氏）

ご紹介いただきました「白小おやじの会」で事務局をやっております、笹川と申します。どうぞよろしくお願いします。仕事は、白根の株式会社笹川プラスチック工業所というところで、射出成形と言われる自動車の部品ですとかＯＡ機器、家電製品などの部品を作っております。新潟県プラスチック工業振興会の会長も務めております。

早速、発表に移らせていただきます。先日、ＰＴＡの研究大会が白根であり、そこに出席していた生涯学習課長から、もう一回話してくれないかということで要請をいただきました。

去年までＰＴＡの役員を11年間やっておりました。最初は、嫁さんが「あんたが行くと、いろいろな役を引き受けてくると悪いから私が行く」と言って、いきなり委員長のポストをくじで引き当てまして、それで私に行ってくれということで、それから11年間です。翌年には、前任の副会長から「後任は１年で間違いなく探すから１年間だけ副会長をやってくれ」と言われ、「そろそろ時期だよ、誰か見つかったか」と言ったら、「そんなわけがない、１年で」と言われ、副会長を数年やった後、ＰＴＡ会長を３年間務めさせていただきました。その後、校外指導委員長をやって、副会長をやって、今は、一兵卒としてＰＴＡで頑張っているところです。

「おやじの会」の設立は、私の前のＰＴＡ会長だった吉田会長が、７年前の全国ＰＴＡ大会に出たときに、「おやじの会」の存在というのを知り、次の年のＰＴＡ会長の候補にあがっていた私に白根にも作ってみないかと相談があり、私もあまり深く考えない方なので、いいのではないかと言って作ったのがきっかけです。

お手元の資料１が「おやじの会」の会則になります。会員資格としては白根小学校の児童の保護者、教職員、小学校区に居住する人たち、自ら「おやじ」であると認識する者ということになっています。実際には、白根小学校のＰＴＡを通してしか案内を出していないので、結局はＰＴＡの皆さんが「おやじの会」に入会されて、子どもが卒業してもずっと居座ってもらっているという状況

です。みんな楽しく活動しているので残ってくれているのだろうと思います。入退会はいつでもＯＫ、お金は一切かかりません。一番大事なのは一番下の付則の部分で、「会員は決していじけず仲良くしなければならない。」この中で一番大事な部分だと思います。

続きまして、今日お配りした資料「白小おやじの会の活動について」を見ながら説明させていただきます。最初のページにある「おやじのマーク」がキャラクターになります。たき火をした炎をつついているのですが、子どもたちにはこれが“ソフトクリーム（？）”に見えるようで、食いついてくれました。

１枚めくって、資金集めですが、会費がないので、設立総会やその後の飲み会などのおつりを活動資金にしてパトロールの看板づくりをしました。2001 年に、私には大阪の平野区にお客さんがあり、たまたまそこに行って平野小学校の下校時間に遭遇したら、ものすごい数の警備の人がいたのです。通学路に転々と保護者が立って、地下鉄の駅にもいっぱい保護者が並んでいる、尋常ではないなと思って調べたら、大阪教育大学附属平野小学校だったのです。2001 年というのは、同じ教育大学附属の池田小学校で痛ましい事件がありました。そこと天王寺小学校と３つ附属小学校があるらしいのです。同じ姉妹校で、あの事件の後、そういう警戒になったということです。あちこちで不審者などが問題になっていたので、看板でも作ろうかといった次第です。簡単にプリントしたものをラミネートして吸盤を２個つけて、車の内側に貼ってもらいます。防犯パトロールスタッフ募集というポスターを貼って、ＰＴＡの皆さんの車につけていただきました。

当時の校長先生は退任されていますが、最後の年に各自治会にお願いし、白小パトロール隊を結成していただきました。私も校長先生と一緒に自治会長を回り、結成をお願いしました。また、学校評議員、ＰＴＡ役員が協力して、地域から 100 万円近く寄附を集め、パトロールグッズや地図を用意し、最初は貧相なものから始まったのですが、今はしっかりしたものができています。旗も通学路に補充され、年輩の方がほとんどですが、朝夕の通学時に子どもたちの様子を見守ってくださっています。

その下は会議の様子です。左側が、まだノンアルコールで立っている吉田会長です。アルコールが入らないといい案が出ないということで、そういう意見にはすぐ同調します。アルコールが入った途端、有料でお化け屋敷やるかなど話し合って、この会議でお化け屋敷をやってみようと決まりました。

この活動には資金が要ります。白根地区の大凧合戦では民間の団体が露店を出しているので、そこでカレー屋をやって儲けようということになりました。元々は国際交流協会というのが白根にあり、その人たちが作ったもので、すぐ売り切れるのを知っていました。知り合いもいたので、レシピごと譲ってくれと引き継ぐような形で始めました。国際交流協会は英会話スピーチコンテストなどをやって成績優秀者をアメリカに半額負担してやったりしていたのですが、合併でなくなったのが非常に残念です。カレーと同時に、子どもたちにも何かやろうということで、250 cc位のミニ缶ジュース引換券を全員に配布し、子どもたちはこれを大切そうに持ってジュース交換に来てくれます。白小には 650 人位いるのですが、半分強の子どもたちがジュースをもらいに来てくれます。

「白根どんどまつり」は、「おやじの会」設立当初から話をしていたものです。公民館が商店街と一緒に冬まつりをやったのですが、商店街の人たちも高齢化し、なかなかできない。白小の方でなんとかできないかと言われたのですが、ＰＴＡだけですとこういう継続事業がなかなか難しい。そこで「おやじの会」も応援という形で加わって、３つの団体ならよろしいのではないかということで６年前に始めました。資料に「はからずも」と書いていますが、新潟市の方でも学・社・民の融合パートナーシップ事業を旗印にいろいろ活動されているようですが、白根も「はからずも」そんなに意識していないのですけれども、こういう形になっている事業のような気がします。どんど焼きとか、さいの神とか、いろいろ呼び名があるようですが、竹を切り出してお飾りを作るのが「白小おやじの会」の担当になります。公民館は、するめを焼く準備とか、体育館でやる○×クイズ大会の景品の用意、ＰＴＡは１月で寒いので豚汁を振る舞う担当で、クイズ大会と豚汁、今はダンスを見たり、いろいろなものをやっています。児童センターがクイズの問題を出したりしています。

こういう事業を継続するのは難しいのですが、「おやじの会」が比較的継続性を持っているというか、６年間、組織としては変わっていない。よく考えると、学校も先生が替わります。学校から見た地域、要するに学校に来てくださる地域の方々というのは、だいたい自治会長で、それも任期があって替わります。ＰＴＡも子どもがいなくなれば替わります。３つは全部替わります。継続事業は難しいけれど、そこにほんのちょっとした力なのですが「おやじの会」みたいなものが入っているだけで、その３つを融合するというか、そういうことができるのではなかろうかと最近つくづく考えているところです。「おやじの会」といっても地域で活躍していらっしゃる方が大勢いらっしゃいますので、当然、地域と学校のパイプ役にもなれます。自治会長も高齢な方が多く、今の学校を正しく理解されていないというか、ご自分の子どもが行っている頃の学校しか知らないのです。その頃の学校と今の学校は、保護者の考え方も子どもたちの様子も様変わりしていると思いますので、ギャップがあります。その辺、我々は両方知っているので、間に入って潤滑剤の役割をしたり、ＰＴＡも役員のなり手がなく、ＰＴＡ会長の負担になっているところを、我々には歴代のＰＴＡ会長が４人いますので、いくらでも呼んでいただければ学校へ行ってアドバイス等もできます。時には潤滑剤、時には接着剤でうまくつなげば、我々の存在価値があるのではなかろうかと思います。

資料をもう１枚めくっていただくと、先ほどの会議のところで決まったお化け屋敷です。メンバーの中にもいろいろな方がいまして、お化け屋敷と言えば、お化けの家ではないか、一級建築士の出番だと言って、小学校の視聴覚室でやるのですが、測りに来て施工までやってくれました。

パーテーションで区切りを造って、黒い農業用のシートは 200 メートルで千円ちょっとと意外と安いので、これを巻き付けます。白根の周りは川に囲まれていますので、そこで竹を切り出して配置する、枯れ枝があると拾って、首を吊す道具にしたりします。は虫類などお化け屋敷に似つかわしくないものまでぶら下げたり、メンバーの中にガス屋さんがいるので、プシュッという音と同時に白い煙が一瞬出るという炭酸ガスを持ってきて、非常に効果があります。第１コーナーに設置して必ずそこで悲鳴があります。そうすると、それが次の人が入る目印になる。あまり音がしないときは止まって前に進まないので、そういうときは大丈夫だよ、俺の後を付いて来て、と誘導したりします。

中には葬儀屋もいて、棺桶に入るときに着る死装束の本物を持ってきて、さすがにみんな着るのは嫌なので、ハンガーにかけ、足に履くものや専用の白い数珠まであるのです。それがお化け屋敷の片隅に置いてありまして、ちょっと皆どん引きで、着る人はいませんでした。内装屋さんもいて、お化け屋敷の中のカーテンや障害物を造ってくれたりしています。空中を移動する首は、白小の長谷川先生が作ったのですが、子どもたちにぶつからないように、結構高い位置なので、怖いときは必ず下を向いてしまうために、誰も見ていないところを首が行ったり来たりで、これは１年でボツになりました。

本番の様子です。緑のジャージは白根第一中学校の生徒です。お化け屋敷は３年やり、今年で４回目です。３年やって、おやじが飽きたからやめようかと言って１回やめたのですが、やめたのを子どもたちが知らなくて、うちの子もそうだったのですが、誰々ちゃんと入るという約束をしているんです。会のメンバーからも「うちの子も誰々ちゃんと入ると言っていたけど」みたいな状態で、子どもたちも楽しみにしているのだと知って、復活させなければだめだと、いい加減な「おやじの会」ですが、そういう声には弱いのです。去年復活させようとポスターまで貼ったのですが、インフルエンザにやられました。学校の体育館で劇を観るのですら中止になったので、お化け屋敷をするわけにはいかないといって中止になりまして、２年ぶりに今年開催させていただきました。資料の表紙を見ていただくと、ちょうど、昨日と一昨日の写真になっております。一昨日、準備をして、終わった後におにぎりをほおばっているところです。その下は、その後の反省会です。満足できた事業のあとの１杯が非常においしくて、このためにやっていると言っても過言ではありません。子どもたちのためとはいえ、本当はこっちのためではないかという気もしております。

今、「おやじの会」は他でもよく聞くのですが、わりとすぐなくなったと聞きます。南区で開催された市ＰＴＡ大会のときも、久しぶりにあった知り合いが、旧新潟市内の小学校のＰＴＡ会長をし

ていて、おやじの会を募集したら２人しか集まらないので、もう１人来てもらって３人で総会したけど、どうしてだろうかと話していました。でも、白根も実際、追加のメンバーがなかなか入らないです。これは時代性といいますか、我々の会も数年経っているし、人も変わっているのではないかという話をしていました。今は募集がなかなか大変です。

続いた理由として、ロゴやＴシャツを用意して、キャラクターみたいなものがあると、いい加減な会でもしっかりした会に皆さんが感じてしまうので、それでわりと出てくれたりするのだと思います。

あとは、補助金を一切もらっていない。どんど焼きは事業に対して公民館に出ていますが、「おやじの会」としては一切もらっていないのです。ただ、お金がないということを楽しむというか、知恵を出して稼ぐといいますか、お金をもらって、これをやってくれと言われると知恵が出ないので、知恵を出すにはお金がないのが一番だと思います。それで補助金等はもらっていない。これが結構効いているのではないかなと思います。

あと、会長と設立のときに話をしたことが一つありまして、規約のほかに、ここはＰＴＡの役員の草刈り場には絶対しないでおこうという約束をしました。だから、「おやじの会」だからと言ってＰＴＡの役員をやってくれませんかと言われた人は、一人もいません。ほかから声がかかるかもしれませんけれども、そういう点もまた入りやすいし、いいのかなと思います。

もう１点、入会も退会も自由ですし、活動そのものも飽きたからやめようかとか、そういう会なので、そういうお気楽さも長続きした要因と思います。

そして、もっと最大の要因は、学校の理解です。校長先生、教頭先生も替わられますが、その辺で理解をいただかないとシュンとしてしまいます。きついことを言われるとシュンとしてしまう意外と弱いところもあります。今回のこのお話も、私に口利きしてくださった長谷川先生という教務の先生が、白小はもう７年目なので、私の勘では今年転勤ではないかと思っていますが、その先生が「おやじの会」の設立からずっとそばにいてくださったので、勝手に顧問と呼んでいるのですけれども、そういった先生の存在が一番大きいかと思います。後に質問の時間もあるということなので、この辺で終わらせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

（相庭議長）

ありがとうございました。続きまして、江南小学校区コミュニティ協議会会長の木島さん、お願いいたします。

（木島氏）―写真スライドとともに説明―

今ほどご紹介いただきました江南コミュニティ協議会と東明第一自治会の会長を仰せつかっております木島と申します。昭和 23 年生まれの 62 歳でございます。生まれは糸魚川ですが、父親の仕事の関係で、小学校に入るときに新潟市に異動しました。人生 50 年と言われ 55 歳になると腰が曲がり、お年寄りと言われるものだったので、小学校５年生のときに建設屋になりたいと親父に申しまして、親父は電気屋だったのですけれども、30 歳で建設業を創設し、ちょうど 60 歳のとき、２年前ですが、伜が 33 歳になりまして、伜に跡目代を譲って、会長職ということで、微々たる蓄えなのですが、自分の貯めたお金は夫婦二人で使おうということで、今、遊び三昧の生活をしております。

まず、コミュニティ協議会の中には、各自治会、老人会、ＰＴＡ、社会福祉協議会や日赤だとか、いろいろな団体、約 45 から 50 くらいのいろいろな団体が集まっております。自治会が基礎になるだろうと私は思っていまして、今日は自治会の活動内容を皆様方にご紹介させていただきます。

私どもの自治会は、昭和 52 年に 35 世帯で東明自治会がスタートいたしました。現在はコミ協全体では 3,200 世帯ですが、東明地内では 1,450 所帯で５つの自治会に分かれております。私どもの第一自治会は、昭和 57 年に 980 世帯からスタートいたしまして、平成 11 年に分離しまして、現在 460 世帯に至っております。

私どもの町内で、一昨年、第２回東区区民ふれあいまつりが開催されました。東山公園という約 4,700 坪の大きな公園がございます。当初、この公園の清掃の案内をいたしましても、30 人から 40

人のくらいの人、大半が役員、部員さんたちでございました。そのくらいの人たちが 4,700 坪に散らばりまして、どこに行ったか分からないような状態でした。それで、より多くの協力を求めるためにはということで、自治会役員が頭を寄せ合って、一部の人ばかりが難儀していて、次の役員になる人が少なくなっていくと、なり手がなくなるのではという危機感が発生いたしました。それではいけないという判断で、平成 12 年頃から改革をスタートいたしました。

一つ目といたしまして、若い世代の協力が少ない、どこの自治会でもそのようなことが言われております。二つ目といたしましては、アパートやマンションの人たちの理解が薄い、この二つの問題を解決するためにはどのようにしたらいいかということから検討をスタートいたしました。この一つ目、二つ目とも、意外と子どもさんのいる若い世代の人たちが大半でございました。それで、子どもたちを集める企画をすると、若いお父さん、お母さん方が一緒に出てくれるのではないかということから、子どもたちの喜ぶイベントを考えようということに方向付けがされました。

現在の公園の管理のあり方といたしましては、全世帯に協力を呼びかける内容としまして、できる限り子どもたちが参加しやすいイベントを組み込んでの企画を立案しております。子どもたちには無理のないように集まってもらい、4,700 坪の公園の中の枯れ葉とか落ち葉を拾ってもらいます。このような形で、公園の中央に集めます。だいたいこの写真の３倍くらい集まります。

２つ目に、町内役員の文化部員が焼き芋を、その人数に応じてなのですが、だいたい平均して焼き芋用の芋を 150 本あらかじめ購入いたしまして、濡れ新聞でくるんで、甘みを出すために芋の両端を切断して、アルミホイルに包んで準備をしておきます。子どもたちの集めた落ち葉で焼き芋大会をやります。当然、火災と紛らわしいため消防署の許可を取ります。焼き芋大会を行い、焼ける間の 25 分から 30 分くらいは、地域のお年寄りの方から紙飛行機、紙ブーメラン、竹とんぼなどを教えてもらい、また、ハーモニカおじさんからいろいろな音楽を演奏していただき、世代交流の時間を過ごします。公園内にはこのような大きなグランドが２つあります。焼き芋が焼けた頃を見計らいまして、灰の中からアルミに包まれた焼き芋を取り出し、大きな芋ですので二つに折って、全員に食べてもらいます。普通の芋とは違って焼き芋専用の芋ですから、皆さん方にとてもおいしく味わっていただいています。

その後、公園内の丘陵を利用して、そうめん流しのビニール樋を 40 メートル敷設いたしまして、小さな子どもから大人までが樋に手が届くように設計してあります。１回で約 100 人の人たちが、そうめん流しを楽しんで食べていただきます。みな顔見知りになって町内での挨拶をよくしようという目的で、役員が一丸となってそうめんを茹でていただいております。そうめんをゆでる設備は、災害時、炊き出しなどのお湯を沸かせる備品で、一般の家庭では扱えない強力なガスバーナーを３組準備して、避難所に避難した後のお湯を沸かす訓練も兼ねて実施しております。

また、去年から近隣の５つの町内の有志の方々で、毎朝、雨の日も風の日も健康増進を目的に、この東山公園で朝６時 30 分からラジオ体操を実施しており、その 15 分位前に公園に来ていただき、犬、猫のふん、それからごみ拾いを簡単にしてもらってからラジオ体操を実施して、友好を深めております。これらの毎日の行動で、常に公園内がきれいになっており、気持ちのよい生活空間が生まれております。

最後になりますが、春の日曜日に「安心・安全パトロール東明隊」と現役員が合同で、公園の入口にあじさい 300 株を植栽いたしました。通る人々に、この公園は地元の人たちで力を合わせて管理をしているのだということを知ってもらうために、この写真のメンバーで一汗かきました。４年後が大変楽しみです。以上で発表を終わります。

（相庭議長）

どうもありがとうございました。続きまして、西田委員から報告をお願いしたいと思います。

（西田委員）

ヒーローズファームの活動紹介です。自己紹介のプロフィールシートをお手元に配りました。私も実は白根市生まれです。育ちは千葉県で母の実家が白根市だったのですが、新潟大学農学部に入学するというご縁で新潟に来ました。在学中に農業に目覚め、畑の感動にうち触れて、これをみん

なに伝えなければいけないのではないかと思い、在学中の 99 年、まきどき村という団体を設立し、それと同時に五十嵐から巻町に引っ越しまして、まきどき村という畑のある公園づくりをスタートし今年 12 年目になりました。今でも毎週日曜日、「人生最高の朝ごはん」という活動を行っております。

まきどき村というのは、じょんのび館という温泉がある西蒲区の福井というところで、まだ茅葺きの家が残っており、それをみんなで保存していこうという佐藤家保存会というＮＰＯ法人があります。その活動にたまたま参加し、その地域のおじいちゃんたちが非常に地域のことを愛し、地域を誇りに思って活動していることに感動しまして、もっとまちなかでもやらなければいけないのではないかと思い、まちづくりに興味を持ちました。

2000 年に卒業し、2001 年に会社に勤めて９か月くらいで辞めたのですけれども、そのとき、運命の出会いで、ある中学３年生に出会いまして、そのお母さんから家庭教師をしてくださいと言われ、その子は不登校で学校に行っていなくて、勉強をみていたのですが、受験まで２か月くらいしかなく第一志望に受からずに定時制高校に行ったのですが、そのときの体験が非常に大きく、その子がだんだん元気になっていく、こういうことを仕事にしたいと思いました。中学生とか高校生という人生に悩める時期に、一緒に人生を見つめ、ともに悩むような仕事をしたいと思いました。自分だけではだめではないかと思い、地域の大人がその役割をいろいろな場面で担えるようにしたいと思い、ＮＰＯ法人「虹のおと」を 2002 年に設立し、現在、名称を「ヒーローズファーム」という名前に変えました。ヒーローが育つ農園という意味です。農園というのは人間関係のことです。そういう形で、今、活動をしております。ヒーローズファームは、一人の優秀な先生がヒーローを生むのではなく、いろいろなかかわりの中でおいしい大根ができるのではないかという思いを込めました。

ヒーローズファームは、若者と地域をプロジェクトでつなぎます。若者は「当事者意識」と「価値創造力」と「組織運営力」という力を身につけ、地域は「推進力」と「突破していく力」と「原点に戻る力」を得ていくのではないかと思い、それらを重ねていくことで未来を作っていくヒーローが生まれるのではないかという活動をやっております。

具体的には、99 年から、まきどき村という日曜日に畑の農作業をして、みんなで料理を作って、いろりを囲んで朝ごはんを食べるという活動をしております。近所の小学生がずっと来ていたのですが、今は６年生になって来なくなったり、弟は野球を始めたので来なくなったりもありますが、現千葉県知事もテレビの取材で１回来たことがあります。写真右側です。ヨネスケさんも来ました。

もうひとつ、2004 年の中越地震のボランティアをきっかけに、子どもと遊ぶボランティアを川口町でしていました。地震のときだけではなくて通常時から必要なのではないかと思い、そのときに「駄菓子屋楽校」という、山形県の松田さんという中学校の先生が書かれた本を読んで、まさに先ほどのお二人の方がおっしゃられたように、地域で大人と子どもがふれ合うような場づくり、それを屋台形式でやるものです。いつか子どもも屋台を出す側に回るというのが、ポイントだと思っています。2005 年からはじめ、今年で６年目になりますが、毎年「だがしや楽校」というイベントを夏にやります。通常時は「虹のひろば」というのを巻の神社でやっていまして、今は、私が西区に引っ越してしまったのでやっていないのですが、年２回の「だがしや楽校」は今年もやりました。

2008 年から、大学生向けのサービスですが、大学生に当事者意識と価値創造力を備えた未来をつくる人になってほしいということで、企業の社長と大学生がともにプランを考える、そんなイベントをするようになっています。

2009 年、農家ファンクラブでは、まきどき村の延長上にあるような形ですが、西区の赤塚の中原農園さんと協力して、農家のファンクラブを作るという活動をやりました。親子連れの方、お孫さん連れの方などが多く来て、ファンクラブなので、農家の方の邪魔にならないように勝手に売り込みもするという形で、今年は北区の高儀農場さんで活動しました。農家ファンクラブということで、子どもやいろいろな人が畑を舞台にいろいろなイベントを作っています。キャンプみたいな感じで、何もないので水から何から全部自分で持っていかなければいけないのですが、そのような形でやっ

ています。

大学生向けには、今年の７月に、青陵大学が中心にやっている共生型大学連携事業の委託を受け、地域留学のプログラムをつくりました。先ほどの旧庄屋佐藤家をベースに、岩室温泉を回ってツアープランを考えるというのをやりました。現在は加茂留学として加茂の商店街を舞台に大学生が何かできないのかと、ワークショップ等々をおこなっています。

全部に共通した考え方としては、企業の課題、地域の課題があり、自分の課題に地域とか社会の課題を合わせてプランを作っていくというのが、ヒーローズファームのプランの作成です。地域留学でいうと、地域の課題は、岩室温泉にもっと人を呼びたいという課題があり、そこに対して大学生が自分の問題意識を重ねてツアープランを作ったわけです。グランプリを取ったのは、一人暮らしのお年寄りが元気になるようなツアープランです。すごく共感を呼んで、投票によってグランプリになりました。岩室屋さんで押し花をやってハガキを作るのですが、それで終わらないで花を摘みに行くのです。花を摘みに行くのは、次の人が押し花を作るためにです。そういう生き甲斐を与えていくようなプランになっていて、青陵大学の学生が、一人暮らしの高齢者の気持ちについて考察することが専門だったみたいで、そういう形で、プラン自体は簡単だとしても、ワークとして非常に学びの多いものになるし、社会起業家的な人材ができるのではないかと思います。私たちは、社会・世の中が変わってきて価値観が多様化したり、すべての仕事がサービス業化したり、税収が下がって行政がスリム化している中で、自ら価値を作って価値観を確立し、高付加価値を生んでいけたり、地域社会に貢献するような人材を生んでいきたいと思って活動しています。

西区に引っ越しまして、中高生にアプローチしていきたいと思っています。中高生は日常生活の中で「不安」と「不信」と「不満」がたまっているのではないかと思っていて、そこは学校と家庭以外に居場所がなかったり、大人と出会う機会がなかったり、勉強と部活以外にチャレンジの機会がないということがあるのではないかと思い、そのために居場所を作って人間関係を作っていこう、あこがれと出会うチャンスを作ろうということです。部活ではなくてビジネスで、八百屋で野菜を売るというチャレンジもいいのではないかと考えています。今回、「がんばるまちなか支援事業」に採択され、内野駅前のビルを拠点に、地域の学びの拠点、地域と若者がともに挑戦するという、「食べる」「学ぶ」「見せる」という三大コミュニケーションツールを活用して、地域の拠点を作っていきたいと考えています。三大コミュニケーションツールで入り口を作って、地域の内野のお祭りや、大学生が行うイベントに中高生が参加したり、そういう形を積んでいく中で、小さな成功体験を積み、中高生自身が提供側に回っていくようなものができていくといいと思っています。

最後の事例の２つは、僕たちがこれをアレンジしてやりたいと思っているもので、ひとつは会津の「ジュニアエコノミーカレッジ」ですが、小学校５・６年生が半年かけて地元のものを料理屋台として出店するプログラムで、これは商工会議所がボランティアでやっているものですが、こういう形で起業教育、別に起業家になるための教育ではなくて、自分で価値を生むとはどういうことかというのを学ばせたいというプログラムです。

もう一つは、シブヤ大学です。東京の渋谷で、企業の社員や技術者が講師になって、主に20代向けに多様な講座を開催しています。これはＮＰＯ法人で、渋谷区からも生涯学習事業で予算がついたり、企業からの会員費、企業がシブヤ大学の授業をやるときは、何十万円という金額で授業を買うのですが、そういうような形でＮＰＯ法人で講座を運営しています。

私たちは、民間の事業者ですので、どこかで収益を得なければいけないというギリギリの中で、どうやって地域の子どもも含めて学びの場が提供できるか、今、必死に考えて活動をやっているところです。

（相庭議長）

ありがとうございました。お三人の発表は興味あるものがたくさんございました。ここから30分ほど今の発表を踏まえてご意見、ご質問等をとっていきたいと思います。それでは、どなたのご報告からということではなく、自由に委員の皆さんから質問・意見等を出していただけたらと思います。自由な形でお互いに認識を深めていきたいと思います。

（雲尾委員）
白小の会則には、役員１名、副会長１名とあって、笹川さんは事務局長という立場ですが、運営体制というのをもう少し、どなたがどういう形で運営されるのかというのを教えていただきたい。
（笹川氏）
本当は事務局長というのは特にはなく、事務局ということでやっています。
最初は、大丈夫だろうかと配慮はしたのですが、今はお化け屋敷とおまつり広場、ほかに学校から要請があれば集まる程度です。新たな事業をやるというのはないので、あまりまじめな会議は開いていないのですが、年に１回総会を開き、そこで常の活動をだいたい決めます。学校から要請があれば、例えば、運動会の前に雨が降った後、グランドがびちゃびちゃになったり、そういうときは緊急連絡でみんなに集まってもらって、水を取り除いて砂を入れたり、そういうのは随時やったりします。基本的に総会以外では、会長、副会長と私の３人でだいたい話します。
（雲尾委員）
事務局は、お一人ですか。
（笹川氏）
一人です。
（相庭議長）
白小の「おやじの会」の会に大変関心があって、私も８年ほどＰＴＡ会長を順番で巻かされましたので、大変参考にさせていただきました。質問ですが、学校側の長谷川先生が頑張っていらっしゃるようですが、学校の先生がいないと頑張れない部分がありますよね。
（笹川氏）
そうでもないです。お化け屋敷では、準備を先生が３人手伝ってくれます。最初、当日は、人数は十分いたのですが、間違って先生にできればお手伝いくださいと案内してしまったのです。校長先生が張り切って必ず手伝いなさいという感じでみんなに声をかけたのです。でも、当日は文化祭ですし、あくまでもメインは文化祭で、我々は隅っこを貸していただいて適当にやるから結構なのです。２年目からは先生に案内しなくなりました。実務的な協力はそんなにいらないです。長谷川先生は、自分も「おやじの会」の一員だと思っている方ですので。実は南区のＰＴＡの発表のときも、私はスーツで行ったのですが、長谷川先生にＴシャツを着なければだめでしょうと言われて、スラックスの上に「おやじの会」のＴシャツを着て発表させられたのです。そんな感じです。
（相庭議長）
こういう会は、飲み会とか、大事な人間交流の場がありますよね。何回かやるかと思いますが、そのとき、家の人から文句は出ませんか。
（笹川氏）
一応、学校行事っぽく言って出ます。別のなんとかの会で飲みに行くとうるさく言われるのですが、これは学校の会というふうに誤解しているので、あまり言われないです。頭に「白小」と入っていますから、学校の用事で行く、みたいな感じで言ってます。
（相庭議長）
学校の方には自立した会で、ご家庭には学校の会ということになっているということですね。
（伊藤委員）
私も子どもの母校で13年間、絵本の読み聞かせグループをしていまして、去年、久しぶりに新規会員が数名入ってくださいました。保護者からスタートした活動で、地道にやっていると、そのうちまた新しいいい意味の餌食というとあれですが、蟻地獄のように、楽しいグループに新しい活力が来るのではないかと私たちの経験から思いましたので、楽しみ続けていただければと思いました。
（笹川氏）
まだ一本釣りしていないので、本当に集めようと思ったら一本釣りすればいいのかなと思うのですが、こういう会なので、あくまでも自主性に任せるのでピンポイントで攻撃はしていません。本当に少なくなってきたら、ピンポイントで攻撃しなければいけないかな、と思っています。

（伊藤委員）

合併で、今までやっていたものがなくなるものを引き継いだり、地元の文化といえるお祭りに絡めた活動や、そういう根っこの部分が、無いようできちんと有るところが、とてもすばらしいなと思いました。

東明第一自治会のことで質問です。あじさいを植栽されたということですが、その苗の財源は、自治会でご準備されたのかどうか。すごくきちんとした取組で、市の公園ということで、その辺は市の方からの助成で苗木を調達されたのか、その辺に関心を持ちましたが、いかがでしょうか。

（木島氏）

あじさいは、花屋さんへ行っても売っていないのです。種はございませんし。それで、３年がかりで町内、それから病院など、変わったあじさいがあるところへ行って、秋になると芽摘みをやりますが、それをうちらでやらせてくれませんかと言って、うちらでやって、私のところの玄関でだいたい 150 鉢くらい３年間挿し木をしました。それで根がついたものを植え、今ちょうど 300 株、２列で 150 株ずつ植え終わったのです。そうしましたら、今年の夏は暑かったので「会長さんが一生懸命に根を付けてくれたのに枯らしたら大変だ」と、お年寄りが変わりばんこに朝晩水くれをやってくれました。水のくれ方で、どこのじいちゃんが撒いてくれたか分かります。だから、翌朝のラジオ体操のときに、何々さん、夕べ水を撒いてくれたでしょうと声をかけます。「水のくれ方で会長は分かるかね」と、みんなでかわいがってくれています。

（伊藤委員）

写真からも、もしかして手作りかなと思いまして。私も毎年剪定したり挿し木しますので。そういう点でも自前で活動を頑張っていらっしゃるのかなと、その辺の確認と、感動も含めてお聞きしました。

（中村委員）

本当にすばらしい、子どもが楽しそうというのがいいですよね。お化け屋敷にしても、芋にしても。一石二鳥というか、三鳥、四鳥なのかも分かりませんが、一つのことが核になり、いろいろないいことに波及しているところが、本当にすばらしいと思います。こういうことが地域でいっぱい活性化してくると本当にいいだろうなと思うのですが、そうしたときに、一つはキーパーソン、お二人がすごくキーパーソンになっている、その存在というのは欠かせない。西田委員もそうですが、そこの問題と、それから一旦できてしまうと、そのときは打ち上げ花火のように１～２年はやっても、長年持続していくシステムが、柔軟につながっていくことの難しさというのがあって、今どうつなげていくかというのは、細かい配分のところで巻き込むうまさとか、そういうところをお聞きした感じがします。そこで、二つのことをお聞きしたいのですが、一つはキーパーソン、人材の発掘とか、よく生涯学習ではいうのだけれども、そうしたときのヒント、コツ、例えば、これから事業や、活性させたいといったときの人材発掘にかかわる提言みたいなものがあったら、教えていただきたいというのが一つです。

それから、活動がつながってくると、小学生が対象だけれども中学生が参加して喜んできてくれるとか、あるいはその子たちが、やがて高校生になり、もっと大きくなっていくので、そういう子たちが参加することについて、学生や高校生という話もありましたが、そういう余地というのはどうなのでしょうか。今はわりと小さい子どもの親子が対象になっていると思うのですが、もっと先の青年というあたりまで広がる余地があるのかどうか。その二つについて聞かせていただければと思います。

（木島氏）

大事なことです。今、私どもの自治会でも継続ということは常に頭においてやっています。24～25 年前に江南小学校ができ、私がＰＴＡ会長のときに、江南太鼓部というものを作ったのです。開校２年目からＰＴＡ会長をやらさせてもらい、開校５周年記念式典で叩きたいとの希望で、それで（万代太鼓の）飛龍会の小泉会長に聞いたところ一式器材は 360 万円だというのです。それで２回目、３回目、４回目のバザーで計 360 万円、１回で 120 万円の利益をあげようということでスター

トしたわけです。その当時の校長、教頭も「総売上が 120 万円でも大変ですよ」と言いました。ＰＴＡの女性軍はそれで皆、引いてしまったのです。だけれども、10 時から２時までの４時間、450 人から 500 人のお父さん、お母さんの力を借りれば十分利益が出るというお話をしましたら、お医者さんや床屋の奥さん方が、木島会長に思案があるのなら聞いてみようと言ってくれて、140 万円くらいの利益が１日に出るとお話し、じゃあ、やってみましょうということになったのです。最終的には夜９時半くらいに決算内容が出るまで、ほとんどＰＴＡの役員が 80 人位、結果待ちして校長室から帰らない。最初の年に 125 万 8,000 円の純利益が出ました。２回目は 120 万円、３回目は 110 万円、それで 360 万円で江南太鼓を作りました。吹奏楽の楽器をという話も出たのですが、先生がいなくなったら埃を被ってしまうという話を聞いていたし、縦の連携を目指していたので、25～26 年経つのですが、今、江南太鼓を教えているのは江南小学校、石山中学校を卒業した大人が３人で教えてくれています。そんな理想の形で、地域の子どもは地域で育てるという形でやっていて、江南小学校のふれあいスクールも、石山中学校の子どもが 10 人くらい、高校生も２人、ふれあいスクールに手伝いに来てくれます。

町内の焼き芋やそうめん流しは、役員をやられた方が、次は私もやりたいということで手伝ってくれています。会長がいちいちマイクを持って話をしなくても必然的に集まってきてくれます。これをやりだして２～３年目の頃、だいたい８～９年くらい前から防災訓練を入れるようになりました。町内のボランティアの中で知恵を出してと言っても、知識のない人は知恵が出ない。まず知識をつけましょうということです。今年はちょうど先週の日曜日の 10 月 24 日で、中学生、高校生が何人か来てくれて、ジュニアレスキューの訓練をやりました。知識のない人は、いざとなったら自分の命を守れる知恵が出せない、家族の命も守れないのだという話を私も口癖のように言っています。今回ノーベル賞をもらったお二人、75 歳の方と 80 歳の方が、どんな勉強をしていたかというと受験勉強が基礎になって、応用に応用を重ねてノーベル賞をもらえるようなところまで進まれたというようなことを聞きました。要するに、基礎がない子には応用ができないということで、常々、幼稚園の子から、知識がないと知恵はでないということを耳にたこができるくらい言っています。そうすると、何かしら覚えようという気構えの人たち、そういう集団が集まってくるのです。

町内会の副会長は 51 歳の男性ですが、いろいろなイベントを、セクションの責任者の形でやってくれています。人を育てるということは短期間ではできませんから、時間をかけながら着実にみんなで絞り込んで、同じスタンスでいかないと、同じ役員の中でも一人合っていないとちぐはぐな格好になると思います。裏方としてはそれが一番大事なことです。それはあまり表立って言葉では言えないかと思うのですが、大切なことです。

（笹川氏）

キーパーソンについてですが、私の場合は小学校で募集をかけるので、先生からの情報です。先生は、そういうことは本来あまり言わないのですが、親しくなると言ってくれます。あの人はいいよ、あの人を誘いなと。昨日も実は一人、飲み会だけ出てくれと引っ張って、そういう人が一人いました。基本的には先生情報です。我々が目を光らすのはもちろんですけれども。

あと、今ちょうどいいご提案をいただきましたが、近くに白根高校があるので、今度は白根高校にも頼もうかなと、今ふと思いました。でも、夢は、今の子どもたちが大きくなって、そう言えば俺らが小学生の頃、親父どもが何かやっていたな、お化け屋敷やっていたなと思ってもらいたい。怖すぎるみたいで、子どもたちは翌日、視聴覚室を覗きに来ます。確認に来るのです。だから、相当インパクトがあると思うので、親父どもがやっていたけど俺らも何かやりたいね、みたいな話が将来、十数年先になると思いますが、やれたら非常にいいなと思っています。貴重なアドバイスをいただきまして、ありがとうございました。

（伊藤委員）

うちの校区の小学校だと、地域教育コーディネーターが機能し始めていて、キーパーソンをうまく学校とつなぐということがあります。私たちも地域のグループなので、すごくありがたい。学校からの待遇、また、先生方の負担も軽減されるという目的ですが、白小でもあるかどうか。

（笹川氏）

地域教育コーディネーターは白小にもいらっしゃいます。お化け屋敷にも入っていただきました。お化け屋敷ではあまりコーディネートということはありませんが、一通り見ていただきました。

（真柄委員）

それぞれに一つずつお聞きしたいのでお願いします。

「おやじの会」につきましては、若い世代の人たちと地域、特にＰＴＡとかＯＢとの関係が非常に大事だと思うので、コミュニティ協議会との関連はどうなっているのかということをお願いします。

木島さんには、自治会としてすばらしい活動で、本当に理想的な形で動いていると思うのですが、今、新潟市のコミュニティ協議会が、自治会との関係を持ちながら防災や、子どもたちの育成などにかかわっているのですが、小学校区の江南区コミュニティ協議会と自治会との連携といいますか、この活動との関係について、広がりを含めてどうなっているのかということをお聞きしたいと思います。

西田委員には、若者をターゲットにして地域と結ぼうとするところで、先ほどの説明の中には大学生が出てくるのですが、農業青年であるとか、若者にはいろいろな職業をお持ちの方がいると思うのですが、どの程度の範囲で若者を対象にしているのかについてお願いします。

（笹川氏）

コミ協との関係ですが、ＰＴＡはコミ協に入っています。「おやじの会」は要請もないので、あったらどうしようかというところですが、あまり目立ちたくはないのです。俺らがやりたいことをやっていればいいという感覚がどうしてもあるので、あまりそういう立派な会には入りたくない。私がＰＴＡの会長のとき、コミ協が立ち上がる時期だったので、ずっと会議には出ていましたが。

（木島氏）

お手元にございます「東明だより」の８月 20 日発行の一番下をご覧ください。私どものコミュニティ協議会も 40 いくつの団体が加盟していますが、自治会そのものも、ものすごく温度差があります。それで、今、「避難所運営訓練マニュアル」を、石山地区４コミ協で２年くらい前から作っています。安心・安全という自分の身に直接関係のあるものからやろうということです。中越地震、中越沖地震で実際に災害に遭われた方たち、それから自衛隊、警察、消防の方たちからお話を聞き、46 項目を８つにまとめたマニュアルを作ったのです。実際に災害に遭われた方たちのノウハウ、例えばブルーシートの準備の仕方とか、ペットの取扱いだとか、各家庭でいらなくなった靴をすぐ捨てないでビニール袋に入れてタンスの上に置いて災害が起きたら履く。玄関を出て長靴を履くまでに自分の家のガラスで足の裏をけがして救護所へ行くことを防ぐというような、そういうノウハウを８項目にまとめたものです。その内容を説明するには、短くても１時間半かかります。それを皆さん方が真剣に聞いてくださるような形で、東区の自治協議会の中の第１部会の委員長を私は仰せつかっておりまして、第１部会で議論・認証し、今度は協議会へ提案させてもらって、東区全体に水平展開しようと動いています。県や自衛隊のヘリコプターの救援隊が入ってくる頃に、全員無事の家は黄色いハンカチ、黄色いタオル、黄色い風呂敷を玄関前に出してくださいというような話がございました。それを先取りして全員無事、避難完了というカードを作ろうとマニュアルの中に入っています。マニュアルの配布は１万 5,000 世帯、だいたい今月いっぱいで全戸配布になります。１冊 70 円です。

11 月９日に、あるコミ協で８項目の説明会をやります。何回かに分けて説明会をやります。それで温度差がある自治会長をなんとか引き込もうということで、まず、自分の身の安全に関することというのが一番まとめやすいのです。私どもの自治会もパトロール東明隊が主力になっています。朝晩、子どもたち通学時に交差点に立つことから、いろいろなイベント、パトロール隊を巻き込んでいろいろな人たちを入れています。自分自身に危害がある、ないというのが一番インパクトがあって、協力体制を呼び込む、一番重要な案件だと思うのです。そんなことで、今、マニュアルを作成して、自治会長の底上げというものをやっています。

各自治会とコミュニティ協議会との関連では、私もコミ協の会長を４年仰せつかって、本当に温

度差があるというのが分かりましたし、東区には11のコミ協があるのですが、コミ協自体も、ものすごく温度差があります。連絡会議のときに、それで地域の代表なのですかと、そのくらいの話を出さないと、ぼけっと２時間の会議が終わって帰っていくというようなこともあります。誰かしら火をつけないといけない。まず、自分の身の安全に関することのマニュアル、災害マニュアルからなんとかしようという作戦で、３～４年かかると思うのですが、それでもっともっとコミ協の裾野を広げたいということで、今、動いています。

（西田委員）

若者の範囲はどこまでかというお話ですが、一番誰にサービスを届けたいかというと、中学生くらいの子どもです。親と学校の先生以外の第三の関係性というか、そういうのを届けたい。今はまだやっていないので、中学生、高校生のためにサービスを提供するには、小学生向けの「だがしや楽校」みたいなものが絶対に必要がある。中学生になったとき、特に男の子は世の中に対して斜に構えています。例えば、僕自身が中学生向けの悩み相談会を無料でいつでも来てくださいと言っても、誰も来る人はいないわけです。先日、仙台で駄菓子屋を10年やっている僕と同い年の人がいて、26歳から駄菓子屋はすごいなと思ったのですが、中学生が買い物に来て部活の話とかをしているわけです。そういう関係性が作れたらと、僕は駄菓子屋をやりたいと思っています。僕自身は中学生くらいの子が一番です。

中越地震の話がありましたが、僕もあのとき、川口町へボランティアで入っていたので、いろいろなシンポジウムに出ていました。高校生だけがパネラーになって、神戸の高校生と中越の高校生がしゃべるというのがあって、言葉は違うのですけれども、地域のつながりの大切さを感じたとみんな言っていたのです。すごく感動し、田舎はそういう地域がまだ残っていますからそうだとも思うのですが、先ほどのお二人の話に関係しているのですが、親父たちの誇りというか、そういうものにどう触れていくか、その機会はどのくらい多いかが、子どもたちが帰ってくる一つの要因になると思います。私は千葉県で育ち、親父の誇りに触れていなかったので、全然ふるさとになっていない。今、新潟市内にいますので、そういう状況にあるのではないかと思います。

（藤澤委員）

笹川さんも木島さんも、また、当会議の議長もそうですが、皆さん、ＰＴＡの役員の経験がありますよね。ＰＴＡというものが、実に重要なキーパーソンになっているのではないかということです。笹川さんのところと私の臼井中学校は隣同士ですので、先ほどの真柄委員の質問と同じことを聞きたかったのですが、併せて、ＰＴＡのように、社会教育とは地域づくりなのだけれども、いろいろなかかわりの中心には子どもがいるわけで、子どもを預かっている幼稚園、保育園とか、学校とどのようにかかわりあいを持とうとされているのか、今、西田委員からはちょっとお話があったので、特に木島さんからお聞きしたいと思います。

（木島氏）

学校とのかかわりは、小学校、中学校の登校日は、パト隊がだいたい18名から20名交差点に立って、安全誘導をやっています。子どもたちのあいさつがものすごくいいです。ほかの学校へ行って私どもが「こんにちは」と言っても、全然あいさつしない。うちらの地域の子どもたちはあいさつをします。まず、地域の方たちから子どもたちに溶け込むように、子どもたちから地域にとけ込むのではなくて、大人の方からまずとけ込みなさい、とやっています。

ふれあいスクールも、８割くらいのお手伝いのメンバーが当自治会の要員です。ほかの地域も東明隊に負けてはいられないと、いい面でプライドを持ち始めてくれて、１人、２人増え始めているというのが実態です。私どもが朝、子どもたちの見守りをやっていると、校長先生が自転車に乗って「ご苦労様」と２日にいっぺん回ってくださいます。年に１回、新１年生が入って落ち着き始める５月末か６月初めに、児童たちとの対面式をやります。制服を着て、帽子も絶対に取らないようにして、これが制服だと、子どもたちはパトロールの帽子を被っている人たちには、スーパーの中でも公園の中でも声をかけてくれるし近寄ってきます。帽子を被っていないおじさんが来たときには近寄らないというようなことで、この衣装のときには君たちを守ってくれているおじさん、おば

さんだよという対面式をします。パトロール隊ができて７年目くらいですが、地域の人たちと小学校とうまく連動しています。

（相庭議長）

ありがとうございました。予定の時間になり、この話を打ち切るのは非常に残念です。まだ聞きたいことがいっぱいあり非常に残念だと思います。本当にいい話を３人の方々からいただきました。会議を代表しまして、お礼を申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

それでは、ここで休憩を入れます。40 分から後半を再開します。

ご発表いただきました笹川さんと木島さんは、ここでご退席なさいます。もう一度、拍手をお願いいたします。

（休　憩）

（相庭議長）

再開します。

協議事項の２「家庭と地域の教育力」実態調査について。まず、事務局より説明をお願いします。

（生涯学習課長）

資料３をご覧ください。前回もお示しした中身です。委員の方々からご意見をいただいたものが、資料３の右欄の枠内に４つ番号をふってございます。これが、いただいた意見です。この説明は、あとに回させていただきます。まず、左側の各項目は調査対象団体です。これは変更はしておりませんが、二重四角で囲んであります、企業、地域団体、その他について確認とご相談をさせていただきたく、こちらから提案させていただきます。

最初に、企業の次世代育成支援対策に取組む企業、それから、新潟市商工会議所、新潟青年会議所について報告がございます。これは資料４として本日、配付させていただきました。説明を原係長からさせていただきます。

（原係長）

（資料４　説明　－省略―　）

（生涯学習課長）

商工会議所、青年会議所、そして次世代育成支援体制に取り組む企業について情報として提供させていただきました。本日、事例発表として企業からもおいでいただきたいと思ったのですが、なかなかいい企業に当たることができずに、まずは商工会議所、青年会議所の情報を報告とさせていただいています。今後、企業等につきましては、どのような形で調査をすればいいかということについて、ご協議いただきたいのが１点です。

２点目は、県ＰＴＡ連合会が連合会独自で調査をする予定です。その中に地域の活動状況を把握する欄があります。市のＰＴＡに別途調査をおこなうとすると、忙しい時期に、また似たようなものが重複しますので、県連合会の調査を参考とさせていただくことが可能なのではないかという提案が２点目です。

３点目は地域団体についてです。先ほど木島会長からも報告していただきましたが、地域団体の対象は自治会なのか、コミ協なのか、この辺を決めたいということです。

最後、その他の欄ですが、西田委員からもご発表いただき、ＮＰＯ法人は欠かせないものと考えておりますが、財団法人、社団法人といった分野をどうしていくかということをご協議いただきたい。この４点についてです。

まず、企業について。企業がどういうことをしているかということを調査するに際しては、２つの視点があろうかと思います。直接地域の教育活動に対する支援をしているところ、例えば、実際に市民を対象にして教育活動を展開している企業も数は少ないでしょうがございます。施設を地域に開放しているもの、地域の要請によって社員を派遣しているというような、わりと積極的な地域貢献をしていらっしゃる企業もあるのではないかという視点と、企業の従業員、社員に対して、健康で、ワークライフバランスを考えた取組をしているという企業内教育の視点、この２つの視点が

考えられるかと思います。

そうしたものをアンケート調査という手法で調査するのは、難しいのではないか。企業については社会教育委員と事務局とで訪問調査をしてみたらどうかと考えました。次回、１月 17 日の会議の際に、どこの会社を訪問するかリストアップしたものをお示しし、１月 17 日以降、年度をまたいで、４月、５月頃までの間に委員お一人２社くらい、事務局が段取りし同行するかたちで訪問していただいて報告する会を持ったらどうかと思っております。訪問先としては教育産業、商店街、次世代推進法の認定会社、それから例えば、本日はご欠席ですが南委員の新潟放送が取組んでいる「キッズプロジェクト」の協賛企業、スーパーや小売店など、そういうところの取組みの情報を集めまして、１月 17 日に、割り振りをさせていただければという提案です。

（相庭議長）

今、出されている提案ですが、要するに企業はアンケート調査をかけても良い成果は出ないだろう、そうすると、やっているであろうという企業の当たりをつけて、いくつか分かれて社会教育委員で実際に訪問し、その成果を今後の建議の方向性に活かしたらどうかというのが、事務局の提案でございます。その根拠は、先ほど説明いただいた、商工会議所及び青年会議所、それから新潟労働局雇用均等室等にヒアリングをかけたところ、調査用紙を配付し全企業を対象にしても出てこないという見通しに立った。が、企業の調査をはずわけにもいかないしということで、頑張っている企業をモデルにし、その実態をとってこようというのが、事務局からの提案でございます。この点について、いかがでしょうか。

（中村委員）

私もそれはすごくいいと思います。結局は、民間の活力をどう活かすのかというところですよね。調査をやったはいいけれど、形だけやりました、どう活かしていいか分からないという形でやるよりは、むしろ実のある形でやった方がいいと思うので賛成です。

コミ協についても、以前、コミ協の活動の様子がよく分かりませんといったら、こんな立派なもの（活動事例集）が送られてきました。そうすると、何か全体に調査をかけるよりもコミ協はコミ協で、それぞれのところで調査をするとか、まとまった一式ごちゃまぜにアンケートではなく、コミ協はコミ協に聞いた方がいいのではないか。かえってその方がいいデータが得られるのではないかと思って、企業も多分そうなのだろうと思うのです。企業の意識として、例えば、総合的な学習や生活科などで、お店に見学に来てもらって子どもたちに見せるという類のものはわりといっぱいやっているし、インターンシップもあります。こういうアンケートを一律にかけると、協力しているという意識がないと出てこないかもしれない。実はすごく地域力、家庭教育の力になっているのだけれども出てこない。企業に訪問して聞くことによって、それをどう活力に活かしていけるかを引き出すことが必要で、いろいろなものが聞けるから、これはこれとして一つありだと思います。別な方向として、例えば、学校側の地域教育コーディネーターの方から集約してもらう、生活科とかお店訪問とか、中学校の職場体験とか、どういう企業から協力いただいているかという情報収集の仕方もいいのではないか。この調査ありきではなく、いろいろな方法を重ね合わせることの方が実質的だと思いました。病院とか、子どもたちを受けて入れているところがあると思うので、そういうところの吹い取りも必要かと思います。資料３の下の枠内に病院とありますが、そういうことかと思います。

（藤澤委員）

中村委員の発言に触発され発言しますが、企業訪問はそれはそれでいいと思うのですが、私は今の状態からいくと、原係長が説明された資料４－１の下から３行目の新潟商工会議所の方が言われている「取組んでいない理由」という表現の方が、むしろ重要なことなのかなとずっと思っています。それは、やはり企業が地域の教育力のところにかかわれないという、現状をしっかり押えておかなければ、いくら先進的な取組をしたとしても、そんなことはうちの企業ではできないよと 99%企業が言ったら何もならないわけですので、やはりアンケートはきちっとかけるべきではないかなというのが、私の意見であります。

なお、中村委員の意見ですばらしいと思ったのは、地域教育コーディネーターに聞いてみればいいというのは、とてもいい。学校において、外部との接点は、そこがほとんど押えているはずだという気がいたします。ちなみに、中学校の立場で職場体験というのをやっているわけですが、うちの学校はここ２年くらい、ほとんど秋葉区のようなものですので秋葉区でやったのですが、非常にたくさんの企業、中小企業から協力してくださっております。こういう情報は、実はほかの学校のキャリア教育担当のところからもらうとか、そういうふうにやっています。中村委員の言われるように、キャリア教育、職場体験にかかわっているところは、企業がかかわっていると言えるのではないかと思いました。

（中村委員）

今の話に触発されたのですが、キャリア教育ということに関して、県のセンターの方で今年から取組むみたいだと小耳にはさんだ話があります。キャリア教育ということについて言えば、そういうデータを既に持っているところがあるかと思います。そこら辺のところも、もらえるものはもらえるといい。

（生涯学習課長）

確かにインターンシップやキャリア教育という視点からすれば、企業は子どもたちを受入れて、子どもたちに体験させるという姿勢の地域貢献、子どもたち対象の貢献をしているところがあるかと思います。企業から積極的に地域に出て啓発したり、子どもたちのために主体となって何かするということでなくても、立派な貢献です。そうしたときに、どこまでを建議の対象とするかにかかっていると思うのです。その辺も少しお話ししていただきたい。

（貝瀬次長）

企業に関して言えば、基本的に企業にアンケートを一律に流したところで、我々の目的を達成したような回答はほぼないだろうというのが、実は今の商工会議所の話にしても、青年会議所の話も、まず基本的にあります。ただし、キャリア教育を受入れている、あるいはインターンシップを受入れている、そういった企業のリストがあるとすれば、そういうところに視点を絞った形で聞くことは、今後、委員の皆さんからもご協力をいただきリストアップしていけば可能かと思います。

我々が主眼としているのは、外に向けて、地域に向けて企業として攻めていく、そういうことをやっている企業がないか、そういうのを調べたいというのが、実は今回の主眼ですので、それについて、こういう企業がこんなことをやっていたというようなご意見をいただきたいというのが一つあります。我々もいろいろな付き合いの中から企業をリストアップしていくと、例えばある程度大手の企業であれば、キッズコンサートや食育の関係でやっているところがもちろんあります。具体的に皆さんからもお知恵を拝借しながらピックアップし、深く聞いてくるというような二つの考え方でいけばいいのかなというのが、今の話を聞いていて感じたところであります。

具体的な会社名も挙げながら、リストアップさせていただければと思います。いずれにしても、一律にこういったアンケートをとっても、まず、期待したものを望めない。提案をいただきながら、個々に当たっていかなければいけないと感じています。

（笠原委員）

ロータリークラブや、ライオンズクラブは、社会貢献を主にしていますから、そういう団体の方に聞くとか、そのメンバーに聞くというのも一つあるかなと思います。青年会議所もその中の一つではあると思うのです。そんなところも対象にして考えられないかなと思います。

（貝瀬次長）

確かにロータリークラブとかライオンズクラブはいろいろ貢献をやっていますね。

（笠原委員）

青少年育成もやっていますし、若年層を支援するグループもあります。目的に応じて大きいところでやるのか、協賛企業メンバーを対象にしてやるのか、かけかた次第では乗ってくるかなという気がします。

（貝瀬次長）

もう一つ、今日は間に合わなかったのですが、経済同友会もあります。ここは社長が集まっていて、ある程度の人たちのまとまりですので、紹介してもらえると思います。

（中村委員）

少し飛んだ話で申し訳ないのですが、年度で調査をかけますよね、そうすると、断面の実態がある程度浮き彫りになったとします。けれども、それは水物で、どんどん流動します。どういうスパンでまた調査をかけるのか分からない。あるいは、更新ができるようなシステム、例えば、データベース化のやり方にもかかわってくると思うのですが、そこら辺のことも一つ考えておかないと、そのときは頑張りました、集めた情報をどう更新していくかという、そこら辺は難しいことですが、それがないことには結局、遺産的なものにしかならない。もったいないと思うので、そこら辺についてはどうなのでしょうか。

（貝瀬次長）

確かにご指摘のとおりです。今、我々が２年間でやろうとしていることは、実態を調べ、その結果を見て判断するということ。我々がいま取組む調査は、企業や団体の実態がどのようであるかを調べるのが、第一歩だと思っています。

（伊藤委員）

今回、単発ではあるけれども調査はする。また少し先に調査をし、地域の教育力が増えたのか、減ったのか、施策の効果があったのか、ないのか、先々にまた調べる基本にもなるように、少し先を見た方法で作るということまで考えていけばいいのか、という質問のような、意見ですが。

（貝瀬次長）

当然、施策を打って、また調査するかもしれない。結果はどうなのだと把握しなければならない。そうなれば当然、出てくると思います。

（相庭議長）

事務局から、具体的な企業の実態をとらえたうえで、実効性のある調査をかけたらどうかという提案です。藤澤委員からも出てきましたが、新潟市の企業が社会教育活動、特に地域に貢献があるのかどうかという大きな枠組みを見ると、返ってこないということは、社会教育にあまり影響力がないという言い方も立つ。どちらを取るかというのはなかなか難しい判断だろうと思います。

社会教育委員会議としては、積極的な提言をするという方向を持っていますので、できていなくて嘆くというのは一つの方法ではありますが、積極的な場所に光を当てて、それを大きくしていくためにはどうしたらいいかという形の方が、提言としてふさわしいかと今の議論を聞いていての私の結論でございます。この議論を聞いたうえで、また事務局の方でも方向性を出してもらいたいと思います。私の考え方は、具体的に訪問調査をかけて話を聞いてくるというのが、建議の方向性を考えると、調査手法としては合っているかと、今日の議論で思いました。

１点目の企業調査については、そのような方向で検討させていただくということにまとめさせていただき、２点目のＰＴＡについてです。県ＰＴＡ連合の調査を代替させて使いましょうというご提案です。この点につきましては、いかがでしょうか。資料４－２の調査票の項目を見ますと、だいたいこれで調査できるだろうと。特になければ、２点目については、お借りするということです。

続きまして地域団体について、自治体かコミ協かというところ。これは分けた方がいいということでしょうか。

（生涯学習課長）

コミュニティ協議会は、いくつかの自治会がまとまって構成団体になっていますので、両方調査すると同じ方がだぶって回答することも多いでしょうし、どちらか調査をすると活動の中身が分かっていくだろうということを考えました。現在、行政の方向として地域コミュニティ協議会を中心として地域の活動を支えていこうという姿勢もありますので、先ほど木島会長が、温度がかなり違うだろうというおっしゃり方をされましたが、どのような形で温度差があるのかということを含め、コミュニティ協議会を中心とした調査にしたらどうかと考えております。

（伊藤委員）

それぞれの調査の回答者は誰に依頼するのですか。

（生涯学習課長）

会長です。

（伊藤委員）

そうすると、たいがい同じ人になりますね。

（貝瀬次長）

自治会の会長を兼務している方もいらっしゃいますし、別の形でなっている方もいます。今、コミ協については、ほぼ小学校単位になっています。その規模の把握でいいのではないかというのが、提案です。

（相庭議長）

いかがでしょうか。ご意見なければ、コミ協単位ということでよいですか。もしかすると、実態が出ないのかもしれないですね。

（中村委員）

そのことに関して、先ほど木島さんの方で、表に出てくるものと実際という部分の乖離というのが話の中であったと思うのです。それはぬぐえないのだろうと思います。そうしたときに、質問をかけたとき、イコールにはならないけれども、なるべく実態に近い形にいかに迫られるか、どういう質問をして、どういう答え方をしていただいたら一番そこに近いのかと考えると、例えば木島さんのところに行って聞いてくる。それこそ訪問ではないけれども、聞いてきて、それでこういう質問が出せそうだということで一斉にかけていくというのも、一つ方法かと思います。木島さんのお話を糸口にして一つモデルを作ってみる。

（生涯学習課長）

木島会長のところへは、一度、担当係長が本日の打ち合わせのため、問題点等含めて訪問して伺って進めてまいりました。成功事例でありますけれども、良い例からほかの協議会を見てみると、問題点が見えているとおっしゃっておられましたので、浮き彫りにすることは可能ではないかと考えております。木島会長がおっしゃるには、全体のコミ協のうち良い活動をしているのは３割だろうとのことでした。

（相庭議長）

新潟市社会教育委員会議として建議を出しますので、基本的には行政組織体ベースの方向性で話をすると、コミ協を中心としていますから、その理屈からコミ協を中心にかけるというのは、論理としては一致点ですね。懸念するのは、コミュニティ協議会と自治体の温度差がすごい点です。

（雲尾委員）

コミ協が中心というのは、今の制度がそう作られているということであって、あくまでコミ協は政令市になってから作ったものです。自治会はそれより前からある。自治会は活動してきて、協議会が二重の自治会になるわけですから、そうなってくると、伝統のあるちゃんとやっている自治会が、コミ協の代表に選ばれているのなら分かりますが、コミ協の会長をしている人が、そうじゃない自治会から出ている場合、分からない、実態がつかめないというところもあるということです。

（笠原委員）

各コミ協の問題点や現状を記載している１枚もののプリントが出ています。あれをまとめて何か使えるものはないのでしょうか。それぞれのコミ協で１枚ものがあったと思いますが。

（生涯学習課長）

さきほど中村委員が提示された、前回の会議後に送付させていただいた「活動事例集」の冊子ではないでしょうか。

（笠原委員）

それぞれのコミ協が１枚で出しているものです。問題点とか、盛り上がらないとか、バラバラだとかというものが結構挙がっているのです。率直な意見が１枚もので書式はだいたい決まっている。困っている点とか、そういう視点で出してもらっていますので、それがまとめることができると、

それで一つの資料ができるのかなという気がします。どのくらいの割合、１年に１度出しているものなのかどうか分かりませんが、結構具体的なものが挙がっています。

（藤澤委員）

おそらく各区の地域課あたりで作成しているのではないでしょうか。

（笠原委員）

それぞれの区で、私ですと、西区全部から置いてある。全部抜いてきまして、なるほどと思って読みました。私は西区だけ集めましたけれども、そんな使える資料があったらと思います。

（相庭議長）

無理が若干あるかなという気がしなくもありませんが、コミ協ベースで調査していきませんと、建議の方向がずれることがあるかと思います。ただ、コミ協ベースにしたときに、検討する必要性が出てくるだろうということです。地域の条件を考えたときに、自治会ベースでやっても集まらないのに、集まらないのを集めて、集まるわけがないというのが普通の論理ですが、コミ協の実態をある意味、表していますので、そういうことを踏まえたうえで考えていくという方向でいきたいと思います。

それから、４点目ですが、ＮＰＯ法人、財団法人、社団法人について意見をということですが。

（生涯学習課長）

平成 18 年の事業所・企業統計調査の中で、社団法人、その他の法人等の数字が出ております。それを合計しますと 2,400 超になります。18 年時点のもので、前回、企業のものは移り変わりが多いであろうということで使えないのではという話をいたしましたが、社団法人、財団法人等であれば、ある程度使えるのではないかと思っております。分類の中から教育・学習支援業、医療・福祉を抜いてみますと、対象数は 971 ございました。約 1,000 の団体に調査を加えたらどうかと提案させていただきました。対象とする団体の形態として、ＮＰＯ法人ほか財団法人、社団法人、学校、病院の医療法人もありますので、福祉・医療を加えた形でどうかということです。

（相庭議長）

いかがでしょうか。委員のご意見をいただきたいと思います。

（笠原委員）

資料３に学校を加える、という意見があると載っていますが、学校を加えるのであれば、幼稚園が加えられないかなと思います。幼稚園が地域の子育て支援の拠点になっていますし、とても一生懸命取組んでいるところがある。しかも、直接に保護者とかかわりがあり、支援に力を入れていますので、幼稚園も対象にできないかなと思いました。

（中村委員）

幼稚園ということは、保育園もでしょうか。

（笠原委員）

保育園も。それが難しいのであれば、公立の幼稚園ということでもいいですが、幼稚園・保育園も何らかの形で、対象先として検討していただきたいと思います。

（雲尾委員）

園そのものが回答することとなるのか、社会福祉法人がなるのかということですね。

（相庭議長）

私学の保育園・幼稚園などですね。保育園は社会福祉法人ですね。

（雲尾委員）

学校法人なり社会福祉法人なりが対象に入っているかどうかという点ですね。

（相庭議長）

３つの園で一つの法人ということもありますから、その法人に調査をかければ、３つの保育園についての調査はできます。学校法人もそうですが、いくつかが連携している園を持っていたりしますから、法人対象にすると、出てくるのです。

（生涯学習課長）

学校もそうですし、今、話題になりました幼稚園も法人別です。公立は今のところは考えておりません。

（相庭議長）

社会教育の具体的な答申を出すには、公立は調査対象ではないですよね。法人としてということで対象数は971ということでございますが、いいでしょうか。

（生涯学習課長）

数はあとで精査することになります。

（相庭議長）

数はあとで精査するということですが、だいたい971。18年の調査では、971ということです。景気が悪いですからもっと減っているでしょう。

（生涯学習課長）

資料３の右欄の四角の枠中に、各委員から内容についてのご意見がございました。１～４に、各ご意見をまとめて記載させていただいておりますが、この中身について、この社会教育委員会議で議論するのではなく、今回は正・副議長及び事務局とで検討を加えさせていただきたい、その許可をお願いしたいと思い、協議をお願いしたいと思います。

（相庭議長）

分かりました。今のご提案ですが、会議はもう持てないということもあります。私と副議長と事務局でたたき台を作り、会議へ報告して、皆さんから意見をもらってくださいということでございます。私と雲尾委員ということでございますが、ご了承願えたらということが生涯学習課長からの提案です。よろしいでしょうか。それでは、枠の中の１から４までということで、私と雲尾委員の方で事務局と相談のうえ、作るということでございます。

それでは、報告事項に移りたいと思います。第10回の新潟県社会教育研究大会、こちらは川上委員、藤澤委員、伊藤委員から、10月末に福島で行われた全国大会については笠原委員からです。県大会の報告からお願いします。

（川上委員）

10 月７日に弥彦文化会館へ行ってきました。参加した分科会は第４分科会で、「地域と学校の連携」というテーマでした。発表者は小千谷市の方です。放課後子ども教室とボランティア活動について。小千谷市では、少子化がずいぶん問題になっていて、市内11の小学校の中で児童数50人以下の学校が５校もあるということです。少子化に対しての切実なお話がありました。ひとつだけある大規模校ではボランティア活動は人数が十分だけれども、小規模校は人数が集まらないという地域ごとの課題も発表されました。一番印象に残ったことは、放課後子ども教室は厚労省の管轄で、縦割行政の関係で連携がなかなかうまくいかないというお話をされたのが印象に残りました。

参加した方々からいろいろな意見が出たのですが、実際に子どもたちが望むボランティア活動というのは一体何なのだろという問いかけが発表者からあり、大人が頑張っているボランティア活動と子どもが求めるものの温度差というか、実は子どもたちが一番必要としているのは、傾聴ボランティアではないかというようなお話をされました。私たち大人は活動の中でも忙しいことがあり、子どもたちに耳を傾けるようなことが、子どもたちが一番望んでいることなのではないかということで、参加者の皆さんは同意されて、閉会しました。以上です。

（藤澤委員）

１日目の全大会は、例年のとおり表彰中心のものでありました。

第１分科会「生涯学習によるまちづくり」に参加し、社会教育委員の役割について報告書に記載しました。妙高市の発表者のプレゼン項目を並べたものですので、あとでご覧ください。

ポイントは２つ目「動く社会教育委員をめざして」です。社会教育委員が「まちづくりは人づくり」ということで、市民大学講座を立ち上げ自分たちでおこなったという発表でした。興味を持ったのは、なぜ妙高市はこれだけ社会教育委員が動けたのか。それなりの必然性があると思うことを感想として記載しました。本市のように、社会教育委員と各地区公民館単位で公運審がいるという

ようなシステムとは違い、多くの市町村では社会教育委員と公運審を兼任していることで違うのではないかということでありますが、とても参考になりました。新潟市としては、そういう動きが、市町村によってあると知っておけばいいかと思いました。

大会の全体配付資料とされた、県の社会教育委員の会議の「審議のまとめ（家庭の教育力向上に向けた今後の施策の在り方について）」は、本日、資料７として準備していただいたものです。

（伊藤委員）

私は２日目からの参加でしたが、レポートにある内容が１日目に行われたこととして発表されました。それぞれの分科会について大変中身の濃い分科会であったという印象を受けました。続いての講演会の概要をまとめました。講演者は株式会社曙産業／燕市の大山次郎代表取締役会長です。大変ご苦労された方のお話で、今はものに大変恵まれた豊かな時代だが、若い人や子どもたちが悩んでいる時代でもあるから、苦労したが柔軟に生きてきた人の生の声を聞くような機会があったら、とてもいいのではないか、慰めになったり、また頑張ってみようというきっかけになるのではと思うような、すばらしいお話でした。20 歳の「青春メッセージ」県大会で優勝したエピソードは、総理大臣や歴史上の人でなく、身近にいる人を尊敬し頑張っていきたいという内容で、「せまこうさ」とは、戦後、苦しい暮らしの中で生きていくのが厳しく川に身を投じ命を投げ打った人々をご供養するお仕事をされている人について、亡くなった方を縄や竹の棒で引き上げるのでなく、ご本人が抱き寄せて手厚く葬ったという姿を見て、自分に与えられた、やれることをやっていきたいという話を 20 歳のときにお話しされたそうです。すべてに学びながら柔軟に、しかもご自身の会社の実際の商品の説明もとても楽しいお話でした。

当日配布された、今日の資料７について。19 ページの図表５から新潟県の若い人の姿が少し見えます。図表６は、全国と新潟県の小学生・中学生の「近所の人に挨拶をするか」についてですが、小学校でのあいさつ運動の話を多く聞きますが、中学校では、他の課題も多いからか、あまり、挨拶をしなくなるということかなと感じました。「読書の時間」も、小学校では、まだ読んでいるけれど、中学校では減っています。挨拶も読書も、自発的なものですが、読書離れの中でも、学校で読書を勧めたりする取組は、習慣づけの一助として数字に表れてくるかしらと、自分なりに分析しながら、今、勉強しているところです。

（相庭議長）

ありがとうございました。続きまして、全国大会について笠原委員お願いします。

（笠原委員）

先月末に行われました福島大会全国大会に参加してまいりました。印象に残った点だけ少しお話をしたいと思います。

１日目は基調講演とシンポジウムがありました。基調講演の講師は、株式会社タカラの創業者で、佐藤安太さんでした。「だっこちゃん」「リカちゃん人形」「チョロＱ」などの考案者で、今年 86 歳で山形大学工学部の博士号を取られたということで、これは世界的に見ても最高齢だそうです。とても意欲的な方で、人材育成が最重要課題だというお話でした。

続いて行わたシンポジウムの中で、日本青年団協議会の会長から「公民館に対する要望」が出ました。公民館はコンビニのように 24 時間営業してほしいという話で、会場はどよめきました。公民館を利用しようと思っているときに、公民館はいつも閉まっている、公民館は遅い時間に開いてもらいたいというのが、その理由でした。

２日目は分科会が行われ分科会ごとに解散でしたので、その後の全体会はありませんでした。参加したのは第２分科会「地域の教育力向上」がテーマでした。千葉県八街市と宮城県利府町の事例発表で、どちらも比較的狭い地域の取組だという点と、青少年の健全育成をテーマにしているというのが共通点でした。印象に残りましたのは、特に利府町の事例ですが、まちを一つの学校としてとらえているのがとてもユニークだと思いました。地域の人たちも巻き込んで、小中高は様々に交流するのですが、日常的に交流しているというのがとても特徴的で、感心して聞いておりました。その結果、ここ５年くらい、青少年の非行、万引きというものがほとんどないそうです。以上です。

（相庭議長）

ありがとうございました。以上で、研究会その他の大会のご報告を終わります。

以上で、協議事項、報告事項を終了しましたが、ほかに何かありませんか。それでは、事務局に返します。

（事務局）

終了予定時間を若干経過しましたが、長時間にわたりご審議、大変ありがとうございました。以上をもちまして、本日の会議を閉会したいと思います。

次回は、年明け１月 17 日、月曜日午後２時からこの会場で開催いたしますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。